

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：95401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11802

研究課題名（和文）朝鮮人「満洲」移民の歴史社会学的研究

研究課題名（英文）Historical Sociological Study of Korean Immigrants in Manchuria

研究代表者

朴 仁哲（PIAO, Renzhe）

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員

研究者番号：90752717

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、オーソドックスな歴史学的方法による朝鮮人「満洲」移民研究に社会学的方法を導入した。本研究の成果は、以下のものである。第1、研究方法をレビューして展開した。第2、戦争の記憶と植民地経験の継承についての研究を進めた。第3、日本人の「満洲」移民研究に架橋することができた。第4、東アジアの記憶の場についての研究を進めた。第5、多文化共生研究への予備的考察ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

質的研究方法による朝鮮人「満洲」移民研究は、まだ始まったばかりの萌芽的な研究である。本研究では、文献資料によるマクロな視点および朝鮮人「満洲」移民体験者のライフヒストリー（生活史）によるミクロな視点を組み合わせて、朝鮮人「満洲」移民問題を多層的な視角から考察した。本研究の学術的意義としては、歴史学と社会学の研究手法の融合を試み、朝鮮人「満洲」移民体験者の生活史に多面的にアプローチすることができた。研究成果を所属の学会と研究会のほか、市民講座や公開講座などでも積極的に発信している。本研究の社会的意義としては、今後における東アジアと日本人の共存・共生にとって、示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：This study could be an attempt at introducing sociological viewpoints to the orthodox and traditional study of the Korean immigrants in Manchuria which has been in the domain for the historical study. The results of the present studies are as follows. I reviewed the method of my research and developed it in the first place. I advanced studies of succession of the war memories and the colony experiences in the second place. I was able to form a bridge across the studies of the Japanese Immigrants in Manchuria in the third place. I pursued my studies of "Realms of Memories" in east Asia. I had a deep look at preliminary studies of multicultural coexistence in the final place.

研究分野：地域研究

キーワード：朝鮮人「満洲」移民 歴史社会学 地域研究 東アジア 多文化共生 戦争の記憶 語り部 世代

1. 研究開始当初の背景

朝鮮人「満洲」移民に関する記録はごく少数であり、その中で代表的な先行研究は、次の二つである。一つは、金賛汀が『世界』(498号・499号・501号、1987年)で発表したルポであり、もう一つは、中国朝鮮族青年学会編の『聞き書き中国朝鮮族生活誌』(1998年)である。

旧「満洲」の中国東北地域には、朝鮮半島から移住した朝鮮人「満洲」移民体験者(以下、移民体験者)が、今も生存している。朝鮮人の「満洲」への移動は、帝国日本による朝鮮・「満洲」支配の産物であり、移民体験者の生にその支配が深く関わっている。移民体験者は、植民地朝鮮時代、「満洲国」時代、中華人民共和国時代という三つの時代を生き、戦前・戦後の(日本と中国の)国民国家から周辺化されてきた。朝鮮人「満洲」移民は、日本人移民のような帝国日本の中心から周辺へではなく、植民地の周辺から周辺へ移動し、そして、戦後も中国において周辺に置かれてきた人々である。その周辺性(マージナリティ)のゆえに、移民体験者の移民体験と戦後の生活は、戦争社会学やエスニシティの社会学において、ほとんど注目されてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、朝鮮人「満洲」移民を生んだ帝国日本の戦争・植民地政策の暴力性を明らかにし、移民体験者の生活史を分析することにより、歴史に翻弄され、歴史から隠蔽されてきた朝鮮人「満洲」移民の人間存在を可視化することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究のデータは、主に朝鮮人「満洲」移民の生活史への聞き取り調査の語り(ナラティブ)に依る。本研究は歴史社会学的研究であるが、本課題遂行にはナラティブ・アプローチという研究方法も用いる。また、フィールドワークを行うとともに文献調査も行う。中国と韓国、そして日本国内に現存する朝鮮人「満洲」移民に関係する研究資料や公式文書などを収集し、これらの資料を整理してリストアップを行った。

4. 研究成果

5カ年の研究成果を下記に記述する。

(1) 研究方法をレビューし、展開した

朝鮮人「満洲」体験者の聞き取りには、二つの実施上の困難が伴う。1に、聞き取りの言語が、朝鮮語と中国語であり、さらにそれを日本語に翻訳するという言語上の問題である。とりわけ、移民体験者の意味世界の深層を分析する際に、言語的な読み変えの慎重さが求められる。2に、朝鮮人「満洲」移民の研究は、戦争・植民地・移民をめぐる学際的な研究となる。そのため、聞き取りの分析と解釈には、戦争研究・植民地研究・移民研究に関わる学際的な知識が必要とされる。本研究は、それらの先行研究の主な成果を、朝鮮人「満洲」移民の研究に参照していく。社会学者の桜井厚は、聞き取りにおける「対話的構築主義のアプローチ」を提唱しており、その方法をめぐる議論を参照し、朝鮮人「満洲」移民研究に援用した。本研究はそれを発展させた位置にある。

(2) 戦争の記憶と植民地経験の継承についての研究を進めた

かつて帝国日本が朝鮮半島を植民地化し、戦争を起こしたことにより、東アジア社会に大きな

傷を残した。現在も東アジア社会は、その歴史の傷の後遺症に悩まされている。本研究では、移民体験者への追跡調査を継続するほか、移民体験者の子孫にもインタビュー調査を行っている。かつての旧植民地出身者の子孫が旧宗主国に還流する研究は、東アジアにおいて、まだ萌芽的な研究に属する。本研究では、戦争と植民地を体験していない移民体験者の子孫が、戦争問題と植民地問題をどのように捉えているのかについても研究を進めている。

(3) 日本人の「満洲」移民研究に架橋することができた

歴史社会学者の小熊英二の『日本人の境界論』に依れば、1945年までは、移民体験者は日本人であった(小熊英二『日本人の境界』新曜社、1998年)。朝鮮人「満洲」移民研究を深化させるために、日本人の「満洲」移民研究を参照する必要がある。本研究は、移民体験者の生活を複眼的に考察するため、同時代を生きた日本人の戦前世代にもインタビュー調査を進めている。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のため、2020年以降、中国と韓国でのフィールドワークができなかった。その期間、日本人の「満洲」移民を最も多く送り出した長野県でフィールドワークを2回行い、日本人の「満洲」移民体験者にインタビュー調査を行った。また、植民地朝鮮と「満洲国」における生活を体験した、大阪府に在住する「在満少国民」日本人植民者二世へのインタビュー調査を継続している。

(4) <東アジアの記憶の場>についての研究を進めた

現在、記憶の概念が人文社会科学で重要視されているのは、フランスの歴史学者であるピエール・ノラが率いるプロジェクト「記憶の場」の影響が大きい。記憶の場とは、「場」という語のもつ三つの意味 物質的な場、象徴的な場、そして機能としての場 であり、三つの場が相互関連している例として「世代」を挙げている。

ノラの記憶の場の理論は重要である。しかし、ノラは記憶論的転回のポストコロニアルな可能性を汲み出すことなく、記憶の問いに対して防衛的な姿勢に閉じこもってしまった。板垣他は、「日本では、……、韓国では、……、と単純に切り分けられない場所、あるいは複数の『国民的』記憶の場の間にある溝のような非場所、『どこ』にも属さない話、闇の位置におかれたもの、そうした国民的な記憶のエコノミーから外れた経験を思考することなくして<東アジアの記憶の場>を論ずることはできない」と言及したうえ、<東アジアの記憶の場>を、「安定的な記憶の共有モデルを不安定にさせ、見慣れたもの見慣れないものにするような、絶え間ない批判の運動である」と述べる(板垣竜太・鄭智泳・岩崎稔編著『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011: 21-22)。移民体験者は、三つの時代を生き、朝鮮人「満洲」移民問題は、植民地と戦争と関わっている。朝鮮人「満洲」移民という歴史的現実には、日本と関係すること、中国と関係すること、韓国と関係することなど、単純に言い切れない。本研究では、板垣他が提起した<東アジアの記憶の場>という概念を導入し、研究を進めた。

(5) 多文化共生研究への予備的考察ができた

本研究は上記の学術的な研究成果に加えて、社会還元や地域貢献に寄与する活動を積極的に行っている。研究成果を所属の学会と研究会のほか、公開講座や市民講座、そして集いなどでも広く発信している。例えば、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」で、「越境する人と文化を通して読み解く東アジア 地域から多文化共生を考える」というテーマで、市民講座シリーズを行っている。市民講座シリーズは、2021年5月から月に1回のペースで行っており、2023年3月までのべ23回行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 朴仁哲	4. 巻 25
2. 論文標題 朝鮮人「満洲」移民の移住動態と「安全農村」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島部落解放研究所編『部落解放研究』	6. 最初と最後の頁 95 121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朴仁哲	4. 巻 7
2. 論文標題 朝鮮人「満洲」移民の戦争体験に関する一考察 移民体験者の戦争の記憶を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉岡数子・北島順子著、朴仁哲翻訳	4. 巻 7
2. 論文標題 九一八事変（満州事変）「中国侵略」検証フィールドワーク・ドキュメント・展示・集会活動の記録 教科書総合研究所所蔵資料から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 83-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 東アジアの記憶の場の探求 朝鮮人「満洲」移民研究のフィールドからの問いかけ
3. 学会等名 日本平和学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 複眼で東アジア地域を読む 越境する人と文化を通して
3. 学会等名 北大・地域研究フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 運動する東アジアと朝鮮人「満洲」移民 東アジアの記憶の場を訪ねるフィールドワークを手掛かりに
3. 学会等名 社会理論・動態研究所精神構造研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 語り部活動における自己エスノグラフィーの試み 人の移動と移民研究を手掛かりに
3. 学会等名 社会理論・動態研究所精神構造研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 東アジアの多文化共生について考える 越境する食・音楽・ヒトを手掛かりに
3. 学会等名 北海道日中友好協会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 東アジアの記憶の場としての尹東柱（ユン・ドンジュ）
3. 学会等名 NPO法人さっぽろ自由学校「遊」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 多元的自己を生きること
3. 学会等名 将来世代の平和のために 世代間平和を語り合う集い
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 朴仁哲
2. 発表標題 ナラティヴ・アプローチについて
3. 学会等名 社会理論・動態研究所キーワードセッション
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------